

9/10 Tue.

第591回 定期演奏会  
サントリーホール 19時開演  
SUBSCRIPTION CONCERT No.591 / Suntory Hall 19:00

指揮  
Principal Conductor  
チェロ  
Cello  
コンサートマスター  
Concertmaster

プフィッツナー  
PFITZNER

[休憩]  
[Intermission]

ハンス・ロット  
HANS ROTT

セバスティアン・ヴァイグレ (常任指揮者) -p.5  
SEBASTIAN WEIGLE  
アルバン・ゲルハルト -p.6  
ALBAN GERHARDT  
小森谷巧  
TAKUMI KOMORIYA

チェロ協奏曲 イ短調 (遺作) [約23分] -p.8  
Cello Concerto in A minor, op. posth.  
I. Andante molto sostenuto - Allegro  
II. Adagio molto tranquillo - Allegro

交響曲 ホ長調 [約56分] -p.9  
Symphony in E major  
I. Alla breve  
II. Sehr langsam  
III. Scherzo : Frisch und lebhaft  
IV. Sehr langsam - Belebt

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団  
助成：文化庁文化芸術振興費補助金 (舞台芸術創造活動活性化事業)  
独立行政法人日本芸術文化振興会  
公益財団法人 ローム ミュージック ファンデーション  
協力：アフラック

9/14 Sat.

第114回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ  
横浜みなとみらいホール 14時開演  
YOKOHAMA MINATO MIRAI HOLIDAY POPULAR SERIES, No.114 / Yokohama Minato Mirai Hall 14:00

指揮  
Principal Conductor  
ヴァイオリン  
Violin  
コンサートマスター  
Concertmaster

モーツァルト  
MOZART

チャイコフスキー  
TCHAIKOVSKY

[休憩]  
[Intermission]

メンデルスゾーン  
MENDELSSOHN

セバスティアン・ヴァイグレ (常任指揮者) -p.5  
SEBASTIAN WEIGLE  
小林 成成 -p.6  
ISSEI KOBAYASHI  
長原幸太  
KOTA NAGAHARA

歌劇《魔笛》序曲 [約7分] -p.11  
"Die Zauberflöte" Overture

ヴァイオリン協奏曲 ニ長調 作品35 [約33分] -p.12  
Violin Concerto in D major, op. 35  
I. Allegro moderato - Moderato assai  
II. Canzonetta : Andante - III. Finale : Allegro vivacissimo

交響曲 第4番 イ長調 作品90《イタリア》  
[約27分] -p.13  
Symphony No. 4 in A major, op. 90 "Italian"  
I. Allegro vivace  
II. Andante con moto  
III. Con moto moderato  
IV. Saltarello : Presto

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団  
助成：文化庁文化芸術振興費補助金 (舞台芸術創造活動活性化事業)  
独立行政法人日本芸術文化振興会  
協力：横浜みなとみらいホール  
後援：横浜アーツフェスティバル実行委員会 (横浜音楽祭2019パートナー事業)

9/20 Fri.

第625回 名曲シリーズ  
サントリーホール 19時開演  
POPULAR SERIES No.625 / Suntory Hall 19:00

9/21 Sat.

第220回 土曜マチネーシリーズ  
東京芸術劇場コンサートホール 14時開演  
SATURDAY MATINÉE SERIES No.220 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

9/22 Sun.

第220回 日曜マチネーシリーズ  
東京芸術劇場コンサートホール 14時開演  
SUNDAY MATINÉE SERIES No.220 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

指揮  
Principal Conductor  
ピアノ  
Piano  
コンサートマスター  
Concertmaster

ベートーヴェン  
BEETHOVEN

[休憩]  
[Intermission]

マーラー  
MAHLER

セバスティアン・ヴァイグレ (常任指揮者) -p.5

SEBASTIAN WEIGLE

ルドルフ・ブッフビンダー -p.7

RUDOLF BUCHBINDER

長原幸太

KOTA NAGAHARA

ピアノ協奏曲 第4番 ト長調 作品58 [約34分] -p.14

Piano Concerto No. 4 in G major, op. 58

I. Allegro moderato

II. Andante con moto – III. Rondo : Vivace

交響曲 第5番 嬰ハ短調 [約68分] -p.15

Symphony No. 5 in C sharp minor

I. Trauermarsch

II. Stürmisch bewegt, mit größter Vehemenz

III. Scherzo

IV. Adagietto – V. Rondo – Finale

指揮

セバスティアン・ヴァイグレ

(常任指揮者)

SEBASTIAN WEIGLE, Principal Conductor

さらなる飛翔を目指して  
充実の3プログラム



©読響

今年5月に常任指揮者として初登場し、その精緻な音楽作りで絶賛されたマエストロが早くも再来日。今回は強い思い入れをもつハンス・ロットの交響曲をはじめ、充実の3プログラムを取り上げる。

1961年ベルリン生まれ。82年からベルリン国立歌劇場管の首席ホルン奏者として活躍後、巨匠バレンボイムの勧めで指揮者に転向。2003年にフランクフルト歌劇場でR. シュトラウス〈影のない女〉を振り、雑誌『オーパンヴェルト』の「年間最優秀指揮者」に選ばれた。04年から09年までバルセロナのリセウ大劇場の音楽総監督を務め、ベルク〈ヴォツェック〉やワーグナー〈タンホイザー〉など数々の名演奏を繰り広げ、評判を呼んだ。07年にはワーグナー〈ニュルンベルクのマイスタージンガー〉でバイロイト音楽祭にデビュー。11年まで指揮し、世界的注目を浴びた。08年からフランクフルト歌劇場音楽総監督の任にある。11年に同歌劇場管が『オーパンヴェルト』誌の「年間最優秀オーケストラ」に選ばれ、15年と18年にも同歌劇場が「年間最優秀歌劇場」に輝くなど、その手腕は高く評価されている。

これまでに、メトロポリタン歌劇場、ベルリン国立歌劇場、ドレスデン国立歌劇場、バイエルン国立歌劇場などに客演を重ねるほか、ザルツブルク音楽祭、ベルリン放送響、ウィーン響、フランクフルト放送響などを指揮し、国際的に活躍している。

読響には16年8月に初登場。オペラでは17年7月の東京二期会のR. シュトラウス〈ばらの騎士〉、今年6月の同〈サロメ〉で共演し、いずれも好評を博した。

9/10  
定期

9/14  
みなとみらい

9/20  
名曲

9/21  
土曜マチネー

9/22  
日曜マチネー

Maestro

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

共催：東京芸術劇場（公益財団法人東京都歴史文化財団）（9/21、22）

助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）

文化庁 独立行政法人日本芸術文化振興会

9/10  
定期

Artist



©Kaupo Kikkas

チェロ

**アルバン・ゲルハルト**

ALBAN GERHARDT, Cello

力強いボウイングと温かな音色で魅了するドイツ・チェロ界の皇帝。1969年ベルリン生まれ。91年ビシュコフ指揮のベルリン・フィルにデビューし、一躍その名を広めた。以後、ソリスト、室内楽奏者として欧米で活躍。マズア、ドホナーニ、ティーレマン、エッシェンバッハ、サロネン、K.ペトレンコらの指揮で、ベルリン・フィル、ロイヤル・コンセルトヘボウ管、ロンドン・フィル、シカゴ響、クリーヴランド管、フランス国立管、バイエルン放送響などと共演。J. ヴィトマン、ウンスク・チン、B. デイーンら現代作曲家との協同制作を行っている。2012年には、ドイツ鉄道とのコラボレーションとして主要駅でライブを行い、話題を呼んだ。録音も数多く、ヴァイグレ指揮の『ブフィツナー：チェロ協奏曲集』も高い評価を得ている。読響初登場。



©Marco Borggreve

ピアノ

**ルドルフ・ブッフビンダー**

RUDOLF BUCHBINDER, Piano

ウィーンが誇る“現代最高のベートーヴェン弾き”が読響初登場。5歳でウィーン音楽大学に入学。アバド、アーノンクール、メータらの指揮で、ウィーン・フィル、ベルリン・フィルなど一流楽団と共演を重ね、70歳を超えた今でも世界の第一線で活躍している。ベートーヴェン作品の演奏をライフワークとしており、自筆譜の研究者としても名高い。録音も数多く、今年よりドイツ・グラモフォンと専属契約を結んでいる。今年10月から来年にかけて、ウィーン楽友協会でもベートーヴェンの生誕250年を記念し、五つのピアノ協奏曲を、五つの楽団（ムーティ指揮ウィーン・フィル、ティーレマン指揮ドレスデン国立歌劇場管、ヤンソンス指揮バイエルン放送響、ゲルギエフ指揮ミュンヘン・フィル、ネルソンス指揮ゲヴァントハウス管）と演奏する。

9/20  
名曲

9/21  
土曜マチネー

9/22  
日曜マチネー

Artist

9/14  
みなとみらい

Artist



©Shigeto Imura

ヴァイオリン

**小林 亘成**

ISSEI KOBAYASHI, Violin

ヴァイグレに才能を認められた期待の新星。1994年生まれ。東京芸術大学大学院を経て、ドイツ・ベルリン芸術大学大学院に在学中。日本音楽コンクール第3位、ザルツブルク・モーツァルト国際室内楽コンクール第2位、青山音楽賞新人賞など受賞多数。これまでに東響、千葉響などと共演したほか、カーネギーホール、テアトロオリンピコ・ヴィツェンツァ国際音楽祭、東京・春・音楽祭、ラ・フォル・ジュルネ・オ・ジャポン、トランス=シベリア芸術祭などに出演。2014年にバッハの二重協奏曲のソリストをヴェンゲーロフと務め、絶賛された。レーピン、ギトリスら巨匠とも共演を重ね、ラ・ルーチェ弦楽八重奏団やステラ・トリオのメンバーのほか、各楽団の客演コンサートマスターとして活躍している。今回が読響初登場。

## プフィツナー

## チェロ協奏曲 イ短調（遺作）

ハンス・プフィツナー（1869～1949）はR.シュトラウスと同世代で、没年も同じだ。シューマンやブラームスといったドイツの正統的なロマン主義を標榜し、19世紀のスタイルを頑なに押し通した点で過去を向いた作曲家だった。頑固なまでにドイツ人独特の質実な精神を持ち続け、大衆性よりも芸術性にこだわる一徹さを貫いたために、孤高とも言える作風が近づきにくい印象を与えているが、このチェロ協奏曲を聴けば、おそらく大方のプフィツナー観は変わるのではないだろうか。ここにはそれくらいロマンティックで魅力的な世界が広がっている。

チェロのために作品番号1の付いたソナタや2曲の番号付き協奏曲を残しているプフィツナーだが、20歳前の1888年に書かれたイ短調の協奏曲には作品番号すらない。フランクフルトのホーホ音楽院時代の作品だが、ブラームス最良の教授に「ワーグナー的」だと指摘され、チェロ協奏曲の伴奏管弦楽に3本ものトロンボーンが用いられていることも不興を買った。その後、この作品は作曲家自身の書き物のなかで言及されることこそあれ、演奏の機会もなく埋もれていた。

オーストリア国立図書館に寄贈された遺品のなかから1975年にまず手稿の断片が発見され、その後バイエルン国立図書館で全体が見つかって、世界初演はようやく1977年に行われた。後年の晦渋な作風がまだ現れずに、濃厚なロマン主義的詩情と情熱が素直に前面に出されたメロディアスな佳作である。

全体はふたつの楽章から構成される。ソナタ形式による**第1楽章**はチェロとファゴットに始まり、高音まで駆け上る技巧的なソロが続く序奏と、情熱的な第1主題、清々しい第2主題がどれも魅力的だ。**第2楽章**は「アダージョ・モルト・トランクイッロ」の3部形式による歌謡的な前半と、「アレグロ」によるフィナーレ部分が続けて演奏され、最後には第1楽章の主題が回顧される。

〈長木誠司 音楽評論家〉

作曲：1888年／初演：1977年2月18日、ヴェルツブルク／演奏時間：約23分  
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部、独奏チェロ

## ハンス・ロット

## 交響曲 木長調

ハンス・ロット（1858～84）は19世紀後半のウィーンに翻弄された作曲家である。父親の喜劇役者カール・マティアス・ロットの妻クリスティーネは、ハンスが2歳のときに亡くなっているが、実はハンスはこの母親との間の子ではなく、著名な歌手・女優のマリーア・ロザーリア・ルッツとの間に生まれた非嫡出子だった。父は後妻としてマリーア・ロザーリアをめとるが彼女はその2年前、オーストリア皇子ヴィルヘルム・フランツ・カール大公との間に次男であるカールを産み落としていた。ハンスとカールはハンスの父カール・マティアスの子として認知されたが、弟カールはハンスが精神を病んだあとの1881年に20歳の若さで結核により早世する。ハンス・ロットという作曲家の周囲にはこのようにやっかいな人間関係があった。その背後にあるのは末期ハプスブルクの首都ウィーンの混乱した社会だ。

父カール・マティアスは1876年に亡くなり、18歳のロットは学業を続けていく上でたいへんな困難に直面した。音楽の才能においては当初から頭角を現しており、歌曲や弦楽四重奏曲、弦楽五重奏曲、魅力的なオーケストラ作品などが修業時代に書かれている。

ウィーン音楽院を卒業する1878年に、ロットは木長調の交響曲（その後、第2番の構想があったので、今日では第1番とも呼ばれる）の第1楽章を完成させ、音楽院の卒業生対象の作曲コンクールに提出したが、ブルックナーの応援があったにもかかわらず、この作品はなんの賞も獲得することができなかった。交響曲は1880年に完成されたが、ベートーヴェン賞の奨学金審査員のブラームスからたいへんな酷評を浴びた。「意味のない楽句が多い」というブラームスの評価は、例えば冒頭のソナタ形式の楽章における主題のように、動機の集積ではなく、「無限旋律」とまではいかないにせよ、歌謡性によって長く引き延ばされた、ある意味ブルックナーのような旋律性によるものでもあろう。

生活に窮したロットは精神を病み、妄想性精神疾患・誇大妄想と診断され、回復は期待できなかった。自作の弦楽六重奏曲の手稿譜をトイレット・ペーパー代わりに用いて破棄するという事件まで起こしたあげく、1884年6月25日に、25歳の短い生涯を閉じる。



20歳で完成したホ長調の交響曲からは、ブラームスやブルックナーの交響曲の残響と同時に、同世代のマーラーに通じる響きを聴き取ることができよう。スイスの作曲家ヨアヒム・ラフの作品からの影響も指摘されている。例えば、**第1楽章**「アラ・プレーヴェ」のブルックナー開始風の冒頭、そしてなによりもそのブルックナーの交響曲第3番を思わせるようなトランペットによる主題提示とそれに対置されたブルックナー風のオブリガート。そしてオルガン的な音響構築。さらには敬虔なコーラル風の**第2楽章**「非常に遅く」。**第3楽章**「快活にいきいきと」は、ブルックナー的な雰囲気を残しつつも、そこから少し離れて、むしろマーラーによるレントラー風のスケルツォを感じさせる。「非常にゆっくりと」した序奏で始まる**第4楽章**には、金管の美しいコーラルが置かれているが、そのあとのホルンやオーボエのソロ、そしてその後の展開は、マーラーの交響曲第2番〈復活〉の終楽章あたりを彷彿させるのではないだろうか。「活気に満ちた」主部に入ると、ブラームスの交響曲第1番の終楽章を思い起こすことになる。そして、コーダの最後はワーグナーの〈ワルキューレ〉の幕切れのようにも聞こえる。前楽章までの主題が回帰される手法ともども、こうした様式の混交が、ブラームスなどに受け入れられない理由であったのかも知れない。

〈長木誠司 音楽評論家〉

作曲：1878～80年／初演：1989年3月4日、シンシナティ／演奏時間：約56分  
楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、ティンパニ、打楽器（トライアングル）、弦五部

※17頁からの特集「ハンス・ロットの時代」でロットが生きた時代の状況や彼を取りまく人間関係について掲載しています。ぜひご覧ください。

## モーツァルト 歌劇〈魔笛〉序曲

〈魔笛〉は、ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト（1756～91）が亡くなる年に発表したドイツ語のジングシュピール（台詞付きの歌芝居）。この形態では、〈後宮からの逃走〉以来約10年ぶりに書かれた作品で、〈フィガロの結婚〉〈ドン・ジョヴァンニ〉〈コジ・ファン・トゥッテ〉の後に続き4大オペラの最終作にあたる。ウィーンのアウフ・デア・ヴィーデン劇場の支配人だった友人の興行主兼俳優エマヌエル・シカネーダーの依頼で、1791年春から9月にかけて作曲され、同年9月同劇場にてモーツァルト自身の指揮で初演された。これまでのような宮廷劇場ではなく、いわば町小屋での上演だったが、回を追うごとに人気を高め、12月5日のモーツァルト没後もさらに上演が続いた。

シカネーダーの台本による物語は、「王子タミーノが夜の女王の命を受け、鳥刺しババゲーノを連れて、僧ザラストロに囚われた女王の娘パミーナを救出しに行ったものの、善悪が逆であることが判明。聖僧になる試練を経たタミーノはパミーナと結ばれる」といった、メルヘンの世界と「自由・平等・博愛」を謳う団体フリーメイソン（モーツァルトもシカネーダーも加盟していた）の思想が合体した奇妙な内容。しかしながら、すこぶるチャーミングな音楽によって、18世紀のドイツ語オペラの最高峰と称され、多数の楽曲が単独で演奏されている。

序曲は、アダージョ～アレグロ、変ホ長調。ソナタ形式で書かれた密度の濃い楽曲で、モーツァルトのオペラ序曲には珍しいトロンボーン3本の活用が特徴をなしている。序奏は、劇中にも現れる三つの和音の総奏に始まる荘重な音楽。この和音はフリーメイソンの象徴ともいわれている。主部に入ると、フガート（小フーガ）で提示される小刻みな第1主題、木管楽器が対話する第2主題をもとに快活な音楽が展開。途中でテンポを落として三つの和音が奏された後、快速調に戻って軽快に進行し、輝かしい終結部に至る。

〈柴田克彦 音楽ライター〉

作曲：1791年／初演：1791年9月30日、ウィーン／演奏時間：約7分  
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部

## チャイコフスキー

## ヴァイオリン協奏曲 ニ長調 作品35

ロシアの巨匠ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー（1840～93）が残した唯一のヴァイオリン協奏曲。ベートーヴェン、メンデルスゾーン、ブラームスの各曲と共に当ジャンルの代表作となっている。

1878年春、前年の結婚破綻による神経衰弱をスイスのレマン湖畔のクラランで癒していたチャイコフスキーは、若手ヴァイオリニスト、コテークに紹介されたラロの〈スペイン交響曲〉（内容は華麗なヴァイオリン協奏曲）に刺激を受けて構想が湧き上がり、わずか1か月ほどで本作を完成させた。そしてロシアの第一人者レオポルド・アウアーに初演を依頼したが、「演奏不能」との理由で拒否されてしまう。しかし、ロシアのドイツ系奏者アドルフ・ブロズキーの尽力により、3年後の1881年12月にウィーンでの初演が実現。当地の大批評家ハンスリックから「悪臭を放つ音楽」と酷評されたものの、ブロズキーが積極的に紹介し続けた結果、大きな人気を獲得し、ついにはアウアーも進んで演奏するようになった。

曲は、情熱と哀愁に満ちた聴き応え満点の音楽。協奏曲としては民俗的な情緒が際立ち、チャイコフスキーならではの旋律美も魅力をなしている。重音その他ヴァイオリンの技巧的な見せ場も多い。

**第1楽章** アレグロ・モデラート～モデラート・アッサイ のびやかでスケールの大きな第1主題と叙情的な第2主題を軸に、華やかさと哀感が交錯しながら進行。技巧的なソロが縦横に展開される。

**第2楽章** カンツォネッタ、アンダンテ 愁いをたたえたト短調の緩徐楽章。弱音を付けたヴァイオリンによる甘美な歌が綿々と続き、中間部ではやや明るめの曲調に変わる。切れ目なく次楽章へ。

**第3楽章** フィナーレ、アレグロ・ヴィヴァチッシモ 躍動的な終曲。ロシアの舞曲トレバック風の歯切れ良い第1主題と、若干テンポを落として奏されるやはり民俗舞曲風の第2主題を軸に、熱狂的な展開を遂げる。

〈柴田克彦 音楽ライター〉

作曲：1878年／初演：1881年12月4日、ウィーン／演奏時間：約33分

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、ティンパニ、弦五部、独奏ヴァイオリン

## メンデルスゾーン

## 交響曲 第4番 イ長調 作品90 〈イタリア〉

ドイツ初期ロマン派の代表格フェリックス・メンデルスゾーン（1809～47）の人気作のひとつ。1830年、メンデルスゾーンはイタリア各地を訪れ、同年11月から翌年4月までローマに滞在した。当地の南国的な空気や謝肉祭などの風物に刺激を受けた彼は、滞在中に本作の作曲を開始。ベルリンに戻った1832年11月にロンドンから新作交響曲の委嘱を受けたことで本腰を入れ、1833年3月に完成した。同年ロンドンにて自身の指揮で初演したものの、出来映えに満足しなかった彼は改訂に挑んだ。だがそれは成就せず、没後の1851年に初稿に基づく版が出版され、第2、3番よりも前の作ながら第4番となった。

本作は、古典的な形式美と旋律美やリズムの妙が共生した名曲。ハンブルクに生まれてベルリンで暮らす北ドイツ人メンデルスゾーンが受けた陽光輝くイタリアの印象が、簡潔・明快に音楽化されており、中でもローマの速い民俗舞曲サルタレロを用いた終楽章には、その影響が直接反映されている。ただし、長調で始まり短調で終わるという交響曲としては珍しい構成がなされ、それが深みを加えてもいる。

**第1楽章** アレグロ・ヴィヴァーチェ 弾けるような開始がまさしくイタリアを感じさせる、明朗で直進的な音楽。冒頭の流麗な第1主題と叙情味漂う第2主題に、展開部で歯切れの良い新主題が加わる。

**第2楽章** アンダンテ・コン・モート 宗教行事の印象を反映したといわれるセンチメンタルな緩徐楽章。哀感をたたえた二短調の部分に、のびやかなイ長調の部分が挟まれる。

**第3楽章** コン・モート・モデラート イ長調ながらも憂いを帯びたメヌエット楽章。ファンファーレ風の間奏部が挟まれる。

**第4楽章** サルタレロ、プレスト 意外にもイ長調で書かれた躍動的なフィナーレ。サルタレロの弾んだ主題に、なめらかな三連符が続くタランテラ風の主題が加わり、畳み掛けるように突き進む。

〈柴田克彦 音楽ライター〉

作曲：1831～33年／初演：1833年5月13日、ロンドン／演奏時間：約27分

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部

9/20  
名曲

9/21  
土曜マチネー

9/22  
日曜マチネー

Program Notes

## ベートーヴェン

### ピアノ協奏曲 第4番 ト長調 作品58

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン（1770～1827）が書いた5曲のピアノ協奏曲のなかで、作曲者による独奏で初演されたのはこの第4番が最後となる。続く第5番〈皇帝〉では難聴の進行から自ら独奏を務めることができなくなり、以後、作曲者はピアノ協奏曲の分野から遠ざかってしまう。

作品の完成は1806年。当時、ベートーヴェンの創作意欲は最大級に高まっており、中期の傑作群が矢継ぎ早に生み出されている。公開初演となった1808年12月22日、アン・デア・ウィーン劇場の演奏会は、同時に交響曲第5番〈運命〉、同第6番〈田園〉、〈合唱幻想曲〉ほかも初演される歴史的公演となった。あまりに自作を詰めこみすぎたのか、演奏上の不備のためか、この演奏会は失敗に終わるが、ピアノ協奏曲第4番が〈運命〉〈田園〉とともに公開初演されたことは興味深い。後半の楽章が連結されている点、そして終盤の楽章でオーケストラの編成が拡大するという点で、3作品には共通したアイディアが用いられているのだ。

**第1楽章** アレグロ・モデラート 古典的な協奏曲ではオーケストラのみで主題を提示し、その後ようやく独奏ピアノの出番が巡ってくるのが通例だが、いきなりピアノ独奏で開始されるのが新機軸。主題の同音連打は、同日に公開初演された〈運命〉の動機を連想させる。楽想はのびやかで明朗。作曲者自身によるカデンツァが2種類残されている。

**第2楽章** アンダンテ・コン・モート 重く引きずるような主題を奏でる弦楽器とモノローグ風の独奏ピアノが対話する。最後はフェルマータで音を長く伸ばして、第3楽章へ。

**第3楽章** ロンド、ヴィヴァーチェ 力強く躍動感あふれるロンド。この楽章で初めてティンパニとトランペットが加わる。作曲者によるカデンツァは1種。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1804～06年／初演：1807年3月、ロプコヴィツ侯爵邸（私的初演）、1808年12月22日、アン・デア・ウィーン劇場（公開初演）／演奏時間：約34分  
楽器編成／フルート、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部、独奏ピアノ

## マーラー

### 交響曲 第5番 嬰ハ短調

「交響曲は世界のようになくてはならない。すべてを包み込まなくてはならないのだ」。グスタフ・マーラー（1860～1911）はシベリウスと会った際にこのように語った。音楽で森羅万象を表現するという大胆な思考法に、シベリウスはさぞとまどったことだろう。

世界を表現するとなれば、なんらかの標題性が必要になってくる。交響曲第1番はジャン・パウルの大長篇小説にちなんで〈巨人〉と呼ばれた。交響曲第2番〈復活〉、第3番、第4番では声楽が入り、テキストが作品の方向性を定めてきた。しかし、交響曲第5番は純粋に器楽のみによる交響曲であり、明示的な標題も持っていない。しかも、当初は伝統的な4楽章制の交響曲として構想されていたという。マーラーは標題のない純器楽作品としての交響曲について取り組んだことになる。

そして、言葉の助けを借りない交響曲であるがゆえに、相対的に目をひくのが「第5番」という数字。交響曲に付与される番号は、単に作曲した順番を示すにすぎないはずだが、「第5」や「第9」といった数字はベートーヴェンのあまりに偉大な傑作によって、しばしば特別な意味付けがされてしまう。「第5」であれば、「苦悩から歓喜へ」「暗から明へ」といった直線的なドラマを連想せずにはいられない。では、マーラーの交響曲第5番もやはりそのような図式に添っているかと問われると、答えはイエスともノーともいえる。葬送行進曲で始まり、最後は喜びにあふれた音楽で閉じられると思えば、これはまさしく「苦悩から歓喜へ」。しかし、終楽章の絢爛たる響きの奔流のなかには、どこか歪んだ笑いが潜んでいるようにも感じられる。

**第1楽章** 葬送行進曲、一定の歩みで厳格に、葬列のように。トランペットのソロで荘重に開始される。葬送行進曲ではあるが、ベートーヴェンの交響曲第5番冒頭の「運命の動機」や、メンデルスゾーンの「結婚行進曲」も連想させる。重苦しい葬送行進曲の間に、激情がほとばしるトリオ（中間部）が2度、さしはさまれる。暗示的な弦のピッツィカートで楽章を閉じる。

**第2楽章** 嵐のように荒々しい動きで、きわめて激烈に。前楽章のムードを受け継いで、闘争的な楽想がくりひろげられる。後半で突然、金管楽器の輝かしいコーラルが出現するが、この勝利は一時の幻。おしまいは虚空に消えるかのよう。

9/20  
名曲

9/21  
土曜マチネー

9/22  
日曜マチネー

Program Notes

9/20  
名曲

9/21  
土曜マチネー

9/22  
日曜マチネー

Program Notes

**第3楽章** スケルツォ、力強く、速すぎずに。大規模なスケルツォ楽章で、スケルツォらしい諧謔味のみならず、舞曲的な性格をあわせもつ。また、随所でホルンがソロ楽器風に扱われ、ホルン協奏曲的な側面も見せる。優雅で陶酔的な瞬間も訪れるが、やがてホルツクラッパーがリズムカルに打ち鳴らされ、骨がカタカタと鳴る死の舞踏を暗示する。外見上の陽気さ、優美さは見せかけだけのものなのだろうか。結尾は華やかだが、やや唐突で強いられたい喜びのようにも感じられる。

**第4楽章** アダージェット、とてもゆっくりと。弦楽器とハープのみで演奏される愛の音楽。マーラーと親交のあった大指揮者ヴィレム・メンゲルベルクによれば、作曲中に結婚した「アルマに対するマーラーの愛の宣言」。ルキノ・ヴィスコンティ監督の映画『ヴェニスに死す』で効果的に用いられ、広く知られるようになった。切れ目なく第5楽章へ続く。

**第5楽章** ロンド・フィナーレ。ホルンの呼びかけに、牧歌的な楽想が続く。軽やかで快活なロンドが始まるかと思いきや、フーガの手法が駆使されて、目まぐるしく変化に富んだ楽想が続く。楽天的な雰囲気を基調としながら、曲はなんども高潮し、やがて第2楽章で姿を見せたコラールが朗々と奏でられ、壮麗なクライマックスが築かれる。ついに歓喜の瞬間が訪れたのか。だが、終結部の狂騒的な喜びはこれ見よがしで、どこかコミカルだ。ここにアイロニーを読みとるべきなのか？

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1901～02年／初演：1904年10月18日、ケルン／演奏時間：約68分

楽器編成／フルート4（ピッコロ持替）、オーボエ3（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット3（エスクラリネット、バスクラリネット持替）、ファゴット3（コントラファゴット持替）、ホルン6、トランペット4、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、シンバル、小太鼓、トライアングル、グロッケンシュピール、ホルツクラッパー、銅鑼）、ハープ、弦五部